

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

調剤と情報 (2008.06) 14巻6号:745～747.

胃瘻からのパシーフTMカプセル注入の工夫—jelly sandwich法—

阿部泰之, 笹田豊枝, 里見真知子

胃瘻からのパシーフ™カプセル注入の工夫 —jelly sandwich 法—

旭川医科大学病院緩和ケア診療室 阿部泰之，笹田豊枝

東旭川病院薬剤部 里見真智子

【はじめに】

がん性疼痛の特徴は長く持続する強い痛みであり、持続すると、患者は身体的苦痛のみならず、不安や抑うつ、自殺企図などの精神的苦痛、社会的苦痛、実存的苦痛に悩まされる。よって痛みを治療することは、患者をこれらの苦痛から解放し、QOLの改善に繋がることは言うまでもない。

近年、がん性疼痛治療薬として様々なオピオイド製剤が開発、臨床応用されており、経口剤をはじめとして種々の剤形が、患者の病態や生活スタイルにあわせて使用できるようになってきている。

一方で患者の状態や療養環境も多様化してきている。近年の大きな変化としてはPEG(経皮内視鏡的胃瘻造設術)の手技が開発され、その簡便性や有用性により急激に普及しており、病院のみならず諸施設や在宅にも胃瘻を持つ患者が増加している。当然、胃瘻からのオピオイド製剤投与の機会も増えることが予想されるが、その手技は十分に議論されていない。

今回、塩酸モルヒネ徐放性カプセルであるパシーフ™カプセルを胃瘻より投与する方法を開発したので報告する。

【パシーフ™カプセルについて】

本剤は、塩酸モルヒネを有効成分とする速放性粒と徐放性粒を2対8の割合で充填したマルチプルユニットタイプの徐放性カプセルである。服薬後は速放性粒から速やかに塩酸モルヒネが放出され、1つ目の血漿中濃度ピークに達し、pH依存性の放出を示す徐放性粒から持続的に塩酸モルヒネが放出され、2つ目の血漿中濃度ピークができる。この2つのピークが重なることにより、投与後早期からかつ長時間にわたって血漿中濃度が一定して維持できる。速やかかつ持続した鎮痛効果が1日1回の投与で可能な経口モルヒネ製剤である。

本剤は通常、カプセルのまま服用するが、嚥下の問題でカプセル服用が困難な場合には、脱カプセルして中の顆粒のみを服用することもできる。速放性粒と徐放性粒の複合製剤であるため、カプセル内の顆粒は残さず、すり潰したりもせずに服用する必要がある。

同様に脱カプセルした顆粒を経管投与することも可能であるが、注入法によってはシリンジやチューブ内に顆粒が残存し、投与量や速放性粒／徐放性粒比にばらつきが生じる可能性があるため注意が必要である。

【症例】

患者は50代の女性。7年前に頭頸部がんを発症した。放射線化学療法を受け、さしたる症状もなく経過観察されていたが、1年前に再発し、その後病状は徐々に進行した。直近のCT画像において、病変は上咽頭左側を主座とし、左鼻腔後方、中咽頭、頭蓋骨（斜台）、左内頸動脈へ浸潤していた。胸腹部臓器には明らかな転移性病変はなかった。進行に伴って開口障害が出現し、口腔内腫瘍の増大も加わって摂食障害を来した。全身状態、予後を勘案した結果、経腸栄養の適応と判断し、胃瘻造設に至った。入院時左頸部の疼痛があったが、塩酸モルヒネの持続静注（10mg/24hr）にてコントロールされた。胃瘻は経皮内視鏡的に造設した。オリンパス社製胃瘻カテーテル：イディアルボタン™・24Fr・2.5cmを設置した。周術期にカテーテルや瘻孔部の問題なく経過し、術後3日目より水分の注入を開始した。その後、栄養剤や各種内服薬（簡易懸濁法）も漸次注入を開始した。在宅移行にあたり、モルヒネの投与も胃瘻からの注入とすべく、注入回数が1日1回で負担の少ないパシーフ™カプセルを選択した。静注から経口へ投与経路の変更に伴い、用量はその換算比より30mgとした。本薬剤の経管投与法を検討した報告はなく情報は少なかったが、水での注入にてシリンジ内への顆粒残存を来すことがあると聞き、注入法を検討した。粘稠度が高いゼリー飲料を試用することにした。当初は内筒を抜いたシリンジ外筒内に、まず脱カプセルした顆粒を入れ、つづいて市販のゼリー飲料（ウィダーインゼリー™）を入れて内筒を戻した後に注入したが、顆粒はシリンジ内に残存した。次に外筒内にまずゼリー飲料を入れ、つづいて脱カプセルした顆粒、その上にさらにゼリー飲料をかぶせて、顆粒を“ゼリーで挟み込む”形にしたところ、一回の操作で顆粒を一粒残らず注入することが可能であった。疼痛コントロールはパシーフ™カプセルへの変更後も良好に経過した。家族にも本手技を指導した上で自宅退院した。在宅で療養継続中である。

ゼリー飲料を使用しパシーフ™カプセルを胃瘻から簡便かつ確実に注入することができた。また市販のゼリー飲料を使用したことは、在宅での入手の利便性に繋がった。この方法をjelly sandwich法と名付け、報告するものである。

【倫理的配慮】

本報告にあたっては、患者にその目的、内容、個人情報の保護などについて口頭で説明し同意を得た。

【本報告の限界】

今回の方法を施行した患者はひとりのみ、パシーフ™カプセルも単一の用量でしかも30mgと最小量であり、高用量の注入は検討されていない。胃瘻カテーテルも一種類、使用したゼリー飲料も一種類である。

【おわりに】

オピオイド製剤の使用にあたっては、十分な副作用対策を行ったうえで、さらに個々の患者の状態に応じてきめ細かい配慮が必要とされる。